知識人の「落し穴」

遠い昔の夏の日、
ある出来事が心に残っています。

私は、大学に向かうバスの中で、友人と議論をしていました。
それは、「歴史の法則性」についての議論であり、
その頃に読んでいた、ある歴史学者の学説について、
当時、注目されていた難しい学術用語を使って
議論をしていたのです。

そのとき、隣の席に座っていた
労働者と思しき年配の人物が、
突如、私たちに語りかけてきました。

学生さん、「歴史の法則性」とは、何だい。

その突然の質問に戸惑っていると、
その人物は、静かな声で、
しかし、体験の重さを感じさせる
深みある声で、言いました。

「繰り返し」のことだろう。

この出来事が、いまも、心に残っています。

なぜなら、このとき、一人の若い学生が、
大切なことを教えられたからです。

素朴な真実を、
ことさらに難しい言葉で語ること。

それが、「知識人」と呼ばれる人間が、
しばしば陥る、落し穴であることを。

そして、その落し穴から抜け出すためには、
自分の心の中の「エゴ」の姿を、
静かに見つめなければならないことを。